

新納忠元く郷中教育の原点

― 歴史を訪ねる旅 (18) ―



下土橋 渡

北を熊本県と接する伊佐市。その市役所の所在地である大口の市街地を見わたす小高い丘に忠元公園がある。県内有数の桜の名所として春には大勢の花見客で賑わう。公園の名前は、戦国時代から江戸時代初期にかけて活躍した薩摩の武将・新納忠元にいろう たなもとに由来する。

公園の奥まった一角に鬱蒼とした木陰がある。そこに鎮座している忠元神社について、鹿児島県神社庁のホームページに次のように紹介がある。

年)に伊佐七ヶ郷は打続く凶作による貧困から脱出しようと、牛馬の導入、用水路・溜池の改修、土地改良、更に前代未聞の川内川下木場下流の開さく、米倉の新設と村起しの気運に燃えた。この精神的拠所として、大口の地頭で島津の名将・知将として親われた新納忠元の神社を創建しようと、藩に天保十三年申請、翌十四年に許可されたので、同十五年二月に忠元の廟所より勧請したものである。忠元社、忠元明神と称されたのち、安政六年忠元大明神と呼ばれた。

神社入口には、案内板と忠元公没後400年記念碑として平成22年(2011年)に奉納された『二才咄格式定目』の碑が建てられている。二才にせとは15、6歳から24、5歳の青少年を言う薩摩の言葉で、『二才咄格式定目』は忠元公が定めた『青少年が日常守る

べき十条からなる規約”であり、案内板に現
代語訳で次のように解説がある。

忠元公が定めた二才咄格式定目

青少年の守るべきまじり

- 一、まず武道を修練せよ。
- 二、いつも武道について討論せよ。
- 三、よその人とは用件外の無駄話はするな。
- 四、組織内で十分に話し合いをせよ。
- 五、友だちであつても悪口を言うな。
- 六、分からないときは自分勝手な行動をせ
ず、話し合つて行動せよ。
- 七、うそを言うな。

八、忠孝の道は、口先だけではなく、人
おくないように実行せよ。

九、山坂に負けない体力をつくれ。

十、二才（にせ、青少年）とは、年齢・体
格服装ではなく精神と実行力だ。

新納忠元が生み出したこの青少年教育の
指針は、薩摩独自の教育である『郷中教育』
の原点と言われる。

一、新納院から志布志へ

宮崎県児湯郡木城町は、島津氏が太友宗麟
を破った1578年の高城川合戦と、その9
年後に秀吉が島津氏を破った根白坂の戦いの
2つの九州天下分け目の戦いのあつたところ
である。

その木城町は、明治の町村制施行により椎
木村と高城村が合併して発足した合成地名で
あるが、かつてこの地は新納院にいりいんと呼ばれてい
た。島津氏4代当主・島津忠宗の四男の島津
時久が南北朝時代に新納院の地頭となつてこ
の地に入り、高城たかしやうを築いて新納氏を名乗つた
ことに、この地の戦国時代の歴史は始まつた。
初代より高城を本拠地としていた新納氏
であつたが、足利政権内で尊氏と直義兄弟の

争いが起こると、直義方の畠山氏によって高城を追われ本拠地を救仁院（現在の志布志、松山と有明の東半分を中心とした地域）に移し、2代実久のときに志布志城の松尾城に入った。新納忠元の家系は、この2代実久より分かれた庶流であり、忠元は大永6年（1526年）松尾城で生まれた。

二、新納忠元

新納本家は、8代忠勝のとき周囲の豪族と争いつつも所領を拡大していったが、9代忠茂のときに豊州家や北郷氏らに攻められ、志布志を失って佐土原へ亡命してしまふ。

新納本家が佐土原へ追われると、新納本家に仕えていた忠元の父・祐久は、家族ともども伊作島津家（現在の日置市吹上地域の一部）の10代当主・日新公（島津忠良）を頼って行き、出仕する。忠元13歳のときだった。以降、忠元は日新公の庇護のもとで、教育を

受け、日夜修行に励み、文武兼備の名将となる基礎を築いていった。成人すると忠元は、島津貴久と島津義久の2代にわたって仕え、島津氏の三州平定や九州統一の戦いなどで武勇とその名声を轟かせた。

忠元は小柄ながら豪胆な人物であった。永禄12年（1569年）の大口城攻めでは、負傷しているにもかかわらず戦場を駆けて「武勇は鬼神の如し」と評された。その後大口の地頭となり、島津義久公より「武蔵守」を賜り、85歳で亡くなるまで約40年間大口の地を治めた。

島津氏で武功者を数える際に最初に指を折って名前が挙がる人物であったことから「大指武蔵（親指武蔵）」と称されたという。このように「鬼武蔵」の異名で恐れられた一方、和歌や連歌、漢詩に通じ茶の湯も嗜む教養人でもあった。



忠元神社入口の二才咄碑（左）案内板（右）



新納忠元公肖像画（案内板より接写）



鬱蒼とした木陰に鎮座する忠元神社



創建時の本殿鬼瓦と薩摩藩家老・調所笑左衛門広郷が奉納した手水鉢

伊佐市曾木の天堂ヶ尾てんじょうがわにある関白陣跡は、天正15年(1587年)5月、豊臣秀吉が島津氏平定のあと、川内泰平寺(現薩摩川内市)から引き揚げる途中野営をし、大口地頭だった新納忠元を引見した陣営の跡である。忠元は秀吉に最後まで反抗し、薩摩隼人の意気を發揮したが、主君島津義久・義弘の命で降伏し、断腸の思いで秀吉に会見した。このときのエピソードは殊に有名である。

剃髪して秀吉の前に進み出た忠元はまだ戦うかと聞かれると「如何に逆らいますよや」と言った後で、「しかし武蔵は武士ですから主人が戦うなら何時でも立ちます。しかし貴方(秀吉)は安心して良いでしょう。義久は一度主従の約を交わした限りは絶対に裏切りませんから」と薩摩の面目を見せた。

降伏の儀式が終わり酒宴となると、座にいた細川幽斎は忠元が白髭を手でもち上げなが

ら酒盃を呑み干した様子を面白がり、『鼻の下にて鈴虫ぞなく』と詠んだ。すると忠元が、『上髭をちんちろりとひねりあげ』と当意即妙に上の句をつけて返歌し、居並ぶ諸将を感心させたという。

三、日新公じっしんこうの教育

郷中という言葉が使われるようになり郷中教育が完成をみるのは、江戸時代中期の安永年間(1772~1781年)だが、郷中教育のはじまりは、日新公(島津忠良)が試みた青少年の志操教育にあったといわれる。

島津氏中興の祖といわれ、文武兼備の名將だった日新公は、神仏の崇敬篤く、神仏儒の三教を良く学び、『薩摩学』『日学』を提唱し、薩摩独特の土風と文化の基盤を築いた。その内容は、忠孝仁義を説き、この実践を奨励するもので、48歳から55歳の間に作ったといわれる『いろは歌』にその思想が遺憾なく

謳われている。

日新公は、毎月五、六度、諸子の子弟を城中に召集して、四書の講義をし、『義理ノ咄(はなし)』『忠義人ノ咄』などを話して聞かせたといわれる。日新公によつてはじめられたこの『咄』の会合の試みは、日新公の遠逝とともに中断してしまふが、これが新しい形で復活すべき事情が起きてくる。

四、留守居役と二才咄格式定目

にせはなしかくしきじょうぎ

文禄元年(1592年)、太閤秀吉が朝鮮遠征を断行すると、薩摩からも義久公・義弘公・忠恒公を始めとして一万余騎の精兵が朝鮮に渡つた。戦争が10年に近い長期間に及ぶに至つて、後に残留した青少年の風紀が乱れてきたのである。この時、留守居役を任されていた新納忠元は、そのことにいたく責任を感じ、風俗改善を決意する。

この目的を達成するために、忠元は、少年

時代に日新公を中心として催された『咄』の会合を思い起こし、青少年たちの間に集団を結成し、その各員が何事に限らず腹藏なく話し会える組織をつくり、これを『二才咄』(にせばなし)と名付けた。さらに、日常守るべき十条の規約を定め、これを『二才咄格式定目』と名付け、実践させた。

すなわち、新納忠元の日新公から受けた薫陶は、ここに青少年教育の指針を生み出した、これがそののち成立する郷中教育の支柱となつた。

五、郷中教育の成立

二才格式定目のもとで二才仲間はそれぞれ集団を組織して研磨に励んだが、『二才咄』への出入りは、比較的自由であり、統制のための規律もなく日常生活における成員の行動は、各自の恣意に任されていた。その状態は江戸時代の元禄5年(1692年)頃まで続

いたと思われる。

しかし、太平に慣れた元禄時代の華美の風潮に風紀は乱れ、元禄15年頃には、怒濤のごとく蔓延した悪風潮は容易に改まる様子もなかった。そのため、二才衆の生活・行動は厳しく規律によって制約されるようになり、第4代藩主吉貴公は、宝永4年（1707年）に、『御袖判条々』という布達を出して、二才衆が交友で遠方に行くことを禁じた。

行動範囲に地域的制限を設けたことによつて、『方限』^{ほうぎん}という概念が生まれた。『方限』は面積でいうと4〜6町四方、戸数でいうと40〜80戸を単位とする行政区画であり、この『方限』は、二才衆の不行跡・喧嘩等を取り締まる目的をもつて起きて来たものということができる。

ついに『咄相中掟』の条項に、この『方限』の概念が取り入れられ、宝暦4年（1754

年）に『稚見相中掟』が出される。この年は、薩摩藩が幕府から木曾川治水工事（宝暦の治水工事）の命を受けた翌年のことだった。こうした経緯を経て、第8代藩主・島津重豪公の安永年間に郷中教育が完成した。

（元九州職業能力開発大学校教授）

【参考にしたサイト及び図書】

- （1）新納忠元ーウイキペディア
- （2）松本彦三郎著『薩摩精神の真髄 郷中教育の研究』（株）島津興業・尚古集成館、2007年発行
- （3）下土橋渡『郷中教育が培った薩摩の士魂／日本主義』No.22・2013年夏、白陽社

